

聖書:ルカの福音書4章25～30節

説教:追い出されるイエス

はじめに

旧約の時代、イスラエルの人々は神がやがて救い主を遣わしてくださるとの約束を信じてずっと待ち続けました。しかし待てど暮らせど主は来られない。敵が攻めてきて多くの者が戦いで倒れ、生き残った者は外国に強制移住させられても、神殿が壊されても、主はなお来られない。それでもイスラエルの人々は救い主を待ち続けました。そしてとうとう今から二千年前に救い主が来られました。長く待たされたのですから、人々はさぞかし喜んで迎えたのだらうと思ったら、どうもそんな簡単な話ではありませんでした。

救い主として来られたイエスは、あるとき、ご自分の故郷であるナザレに戻られます。すでに村の人たちは、イエスが隣の町で驚くようなことをしているらしいとの噂を聞いていました。そのイエスがひょっこり帰ってきたのですから人々の視線がイエスに注がれるのは当然です。さあこれからすばらしいことを見せてくれるに違いない。みな期待して今か今かと待っている。ところがイエスは何かをしよんとする気配は全くなくて、むしろ「預言者はだれも故郷では歓迎されません」と言って人々の期待に冷たい水を浴びせるようなことを言って、急に雲行きが怪しくなっていきます。

そこで終わっていたなら、まだ大きな事件にはならなかったかも知れません。ところがイエスはまるで火に油を注ぐようにして、今日の箇所を語っていきます。いったいここにどのようなみこころがあったのかを考えてまいります。

## 1 旧約の時代

### 1) ツアレファテのやもめ (第一列王記17章10～24節)

イエスは預言者が自分の故郷では歓迎されない事例として、エリヤとエリシャ、この二人の預言者のことを取り上げます。その一つ目は25、26節です。「まことに、あなたがたに言います。エリヤの時代に、イスラエルに多くのやもめがいました。三年六か月の間、天が閉じられ、大飢饉が全地に起こったとき、そのやもめたちのだれのところにもエリヤは遣わされず、シドンのツアレファテにいた、一人のやもめの女にだけ遣わされました。」

エリヤは紀元前九世紀に活躍した預言者で、第一列王記17章10～24節を見るとこのとおりのこと

が書かれています。ツアレファテはイスラエルの国境の外にありましたので、エリヤはイスラエルが大飢饉で困っていたとき、異邦人のやもめの女性のところへ行き、食べるものもなく息子と一緒に死ぬつもりであったところを助ける。その後、この息子は病気で死んでしまったとき、エリヤがよみがえらせた。イスラエルの人たちであればだれもが知っている話です。エリヤが異邦人の女性のところに遣わされた。これがポイントです。

### 2) ナアマン將軍 (第二列王記5章1～19節)

二つ目は27節です。「また、預言者エリシャのときには、イスラエルにはツアラアトに冒された人が多くいましたが、その中のだれもきよめられることはなく、シリア人ナアマンだけがきよめられました。」

このことは第二列王記5章1～19節に書かれています。ナアマンはイスラエルの北隣にあったアラムの国の王に仕える將軍でした。彼がツアラアトに冒されて苦しんでいたとき、エリシャの助言に従ってヨルダン川で七回からだを洗ったら幼子のからだのようにきよくなります。

ここでもナアマン將軍がアラムという外国人であったことがポイントです。二つの例を挙げて、イエスも同じように故郷の人たちには歓迎されないと語ります。

## 2 憤りに満たされた

### 1) これを聞くと

さあ、この後どうなったか。28節「これを聞くと、会堂にいた人たちは憤りに満たされた。」

「これを聞くと」に注目します。いったい何を聞いたのか。もちろん、「故郷では歓迎されない」、そのことを指す。しかし、21節のことにも注目したいのです。「イエスは人々に向かって話し始められた。『あなたがたが耳にしたとおりの、今日、この聖書のことばが実現しました。』」

イエスが今読み上げたイザヤ書の一節、それをあなたがたは聞いた。それで「あなたがたが耳にしたとおりの」と言っています。イエスが読んだ箇所には「しいたげられている人を自由にし」とあって、まことに喜ばしいことが書かれています。「この聖書のみことばが実現した」と言うのですからみな喜んで帰るはずでしょう。ところが見ておわ

かりのとおり正反対です。イザヤのみことばが実現したと言っているけれど、全然実現したようには見えません。これはどういうことでしょうか。

そもそもなぜナザレの人々は腹を立てたのでしょうか。小さな時から知っているイエスが、生意気なことを言いだしたからでしょうか。あるいは、村にいたときは全く目立たなかったのに急に有名人になったので、そのねたみからか。それもあるかもしれません。

## 2) 「実現しました」

イエスが何を語ったかをもう一度考えてみましょう。「預言者はだれも、自分の故郷では歓迎されません」と言いました。そこでとどまっていたのなら、大きな問題にならずに済んだかもしれない。ところがイエスは、子どもでも知っている有名な二人の預言者の名前を挙げて、自分と一緒にしたわけです。これにはカチンと来た。「おまえは、自分のことをエリヤやエリシャと肩を並べる預言者だと言うのか。冗談も休み休み言え。いったい何様だと思っているのだ。」それで会堂にいた人たちはみな憤りに満たされて、故郷から追い出していったのだらうと思います。

そうしますと21節の意味はどうなるのでしょうか。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」

全く実現したようには見えないけれど、イエスが「実現した」と宣言したのですから、イザヤのことばは必ず実現しているはずです。いったい何が実現したのでしょうか。ここでは、救い主が故郷から追い出されようとしています。そのことが実現したというのでしょうか。でもイザヤはそんなことを語っていたのか。イエスが引用した61章ではありませんが、別の箇所でも語っていました。イザヤ書53章3、4節。「彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちが思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。」

イエスは故郷の人々に蔑まれ、のけ者にされてきましたから、確かにイザヤのことばが、この日、実現したことになります。

## 3 遣わされる (4章18節)

### 1) やもめのところへ (7章11～17節)

イエスが、エリヤとエリシャの二人の名前を出して自分もあの預言者たちと同じであるかのような

発言をしたとき、人々はイエスがとんでもない間違ったことを言いだしたと腹を立てました。それは正しかったのでしょうか。仮に、イエスがエリヤやエリシャのようなことをしなかったのなら、ナザレの人々は正しかったと言えます。でもイエスがイエスがエリヤやエリシャと同じことをしたのならどうでしょうか。人々は間違っていたことになります。その答えは聖書に書いてあるのか。ちゃんと書いてあります。

7章11～17節に、一人息子をなくしたやもめの女の話が登場します。7章13節を読みます。「主はその母親を見て深くあわれみ『泣かなくてもよい』と言われた。」その後でイエスは棺に手を触れて「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われると、死んでいた若者が起き上がり、母親に返していく。そのような場面です。もうお気づきのよう、かつてエリヤがしたのと同じことをイエスがなさっています。

### 2) 百人隊長のところへ (7章1～10節)

では、エリシャのことはどうなのでしょう。おなじ7章1～10節にある百人隊長の話が載っています。この百人隊長のしもべが病気で死にかけていたとき、長老たちをイエスの所に送ってしもべを助けてもらうよう、ただおことばをいただきたいとお願いした場面です。イエスはこれを聞いて「イスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことはありません」と言って、しもべをいやされます。エリシャはアラムという外国からやってきた軍人であったナアマンを救いました。イエスはローマ帝国から派遣されてきた軍人であった百人隊長の信仰によってそのしもべを救います。かつてエリシャがしたのと同じことをイエスがなさいました。

当然のことですが、イエスがエリヤとエリシャの名前を挙げたことは正しかったことがこれで証明されます。

### 3) 捕らわれ人のところへ

ではナザレの人々は、救い主を追い出してしまった特別に愚かな人たちだったのか。そうではないと思います。彼らはイエスを小さな時から知っていたのです。それが急に、今日からわたしを信じなさいと言われて信じられるのか。昨日まで一緒に暮らしていたごく普通の人が、今日から私はエリヤやエリシャと並ぶ預言者ですと語るのを聞いて、「はい、信じます」と言えるでしょうか。私だったらとても言えそうもない。イエスは私たち

にすぐに理解できそうもないことを、有無を言わずに語っている印象さえあります。

どうしてそんなことをするのでしょう。もっと人々に受け入れられやすい方法をとることができたはずで、ところがなぜか、わざわざ人を怒らせたり、拒まれたりするようなことをするのです。

イエスはだれの所に遣わされたのでしょうか。

「捕らわれ人」のところ、「目の見えない人」のところ、「虐げられている人」、イザヤはそう言った。これはいったいだれのことでしょう。イエスはどこに行ったのか。一人息子を亡くしたやもめの女性の所へ行きました。愛するしもべが病気で死にかけている、それで苦しんでいた百人隊長の所へ行きました。

ほかの人の所へは向かわなかったのか。いいえ故郷に来てくださいました。では、なぜ故郷の人々を怒らせたのでしょうか。イザヤのことばからわかります。イエスは捕らわれ人の所へ遣わされているのです。そうしたら、イエスが人々を怒らせるのには理由がある。あなたはどのような人なのか。気がつかせるためではなかったのか。あなたは捕らわれ人ではないのか。あなたは目の見えない人ではないのか。あなたはもしかして虐げられているのではないか。もちろんすぐには気がつかない。でも、やがてイエスの十字架を見上げたとき、気がつく。イエスが墓からよみがえるのを見たとき、人々は自分がこの方に何をしたのかを振り返ることになります。私はイエスを自分の故郷から追い出し、十字架につけた者である。自分こそ、捕らわれ人、目が見えないもの、虐げられている者であった。

そのことに気がつくとき、イエスはどこにいるのか。私たちのすぐそばにおられます。倒れかけている私たちのことを心から私たちをあわれみ、

「泣かなくてもよい」と言ってくださる。

そのような主が私たちのところへ来てくださったことを覚えたいと願います。